バシュラールに於ける科学的精神と精神分析

西井元昭

I

我々が始めて出会うガストン・バシュラールという人物像は、その諸作品を通して誠に奇異にして複雑な印象を我々に与えるものである。即ち、科学的思考を再検討する科学哲学者、物質についての精神分析を行う心理主義的哲学者、詩的想像力を展開させる文学的批評家、或は又イマジネールな物質の世界の形而上学者等々、彼の作品から湧出する数々の特徴を味わうものにとって、それらを系統的もしくは図式的に理解することの難しさを感じさせるのも当然であろう。幸いにも、既に幾多のバシュラール論が世に出て[1]、我々のバシュラールについての知識に多大の示唆を与えてくれている。処で、バシュラールは一九二七年に『近似認識に関する試論』及び『物理学の一問題の発展に関する研究』の二つの論文をソルボンヌに提出（出版は翌年）して以来、彼の死の前年（一九六一年）、『ローソクの焔』を発表（遺稿に『フェニックスの詩学』あり）する迄、多数の著作・論文その他を公表して来たのであるが、彼の哲学的探究の三十数年間を、前期（一九三七年頃以前）科学哲学時代と、中期（一九三八年より一九五七年頃迄）物質のイマージュの精神分析の時代及び、後期（一九五七年以後）詩的想像力を中心とした現象学の時代の三期に分けるのが普通とされている。但し、中期にも科学哲学的作品[2]が発表されているし、前期に於いても精神分析的内容のもの[3]が出ているのであって、一思想家の永年に亘る研究を、その研究領域とか研究方法或は思想傾向などに関して時期的に区分すること

が果して妥当であるかどうか、という疑点もないわけではないが、思想家の諸傾向を一度に把握して理解することは極めて困難であって、それらについて何らかの分類或は分析を必要とするのである。それ故、我々も先の一般的区分に従って、前期から中期への推移の過渡的状態を示す作品として、『科学的精神の形成』及び『火の精神分析』を、更に中期から後期への移り行きを示すものとして、『空間の詩学』を位置付けることとする。そこで、現代に於ける科学的認識乃至科学的思考がどうして精神分析という心理主義的方法を要したのであろうか、その上、どうして科学的思考の問題から物質についてのイマージュの精神分析を通して物質的想像力の問題へと移って行ったのであろうか、又一転して、どうして物質のイマージュの分析に際して用いていた精神分析的方法から詩的イマージュ或は詩的想像力の現象学へと進んで行ったのか。我々はそれらの問題について考えてみたいのであるが、本論では先ず彼の科学的思考とは一体如何なる意味をもっているのか、そしてその科学的思考と物質的イマージュの精神分析とがどのようにして結びついているのかを検討しつつ、彼の思想の綜合的首尾一貫性をどこに求めるべきかを模索してみたいと思うのである。その為に敢えて彼の作品にのみ沿って考察して行きたい。

Ⅱ

近代ヨーロッパに於ける科学の発展とその軌道修正を大まかに瞥見するとき、コペルニクスとアインシュタインの二人に代表される科学的思考の大転換を経て現代の科学が成立していることは誰の目にも明らかであろう。中世以来の錬金術が近代化学そして現代化学へと発展する過程で、我々は多くの化学者例えばボイル、ラヴォワジェ、メンデレイエフ、キュリー夫妻等々を見ることが出来、物理学に於いても、ニュートンを始め幾多の物理学研究者を輩出したが、マックスウェル、アインシュタイン、ハイゼンベルク以後急速に理論物理学の発展を目の当たりにすることが出来た。幾何学に至っては近世に入っても尚、ユークリッド幾何学の延長線上で永い年月が費やされ、やっとロバチェフスキーによって非ユークリッド幾何学への足がかりが得られ、その後リーマンやポアンカレが出て非ユークリッド空間を証明した。殊にアインシュタインはそれをリーマン空間として一般相対性原理に用いるに至ったと言われる。

処で、我々が科学的精神という語に接するとき、かのパスカルの幾何学的精神なる言葉を想い起こすのである。パ

シュラールは『科学的精神の形成』の冒頭で次のように述べている、「表象を幾何学的にすること、即ち諸現象を描き一つの経験を決定する諸事象を順序よく並べることこそ、科学的精神が確立される一番大切な任務なのである。実際このようにして、人は、図形化された数量に、具象と抽象との中間に、精神が数学と経験・法則と事実を和解させようと望む中間地帯に到達するのである。かかる幾何学化の任務は多くの場合実現されているように思えるであろう……」[④]と。併し、デカルトの精神やパスカルの幾何学的精神に象徴され、ニュートン力学などに見られる「空間的特性の素朴な実在論に立脚する……最初の幾何学的表象」[⑤]が、単なる表面的な測定作用或は個々の対象や一つの現象の図形化にとどまるとしたら、科学的精神は具象的なものの測定法乃至描出の仕方の考案ということになってしまう。バシュラールによれば、「科学的思考を別々の一対象に、又決定付けられた一つの次元の一現象にさえ集中しようとしても無駄である。一般の思考よりも尚一層、科学的思考はもろもろの関係で生き、それは、一つの現象を一体系に合体させるか或は少くとも一つの現象を一方法の諸原理に従わせることによってしかその現象を認識することが出来ない」[⑥]のである。成程、具象的なものの描写はレアリスムにとって不可欠の要素であるとしても、その描かれた具象的世界が原初的な視覚的空間に於ける形象的又は図形的世界にすぎないとしたら、科学的精神の次元的に深い関係性の意味はそこに存在しないことになるであろう。当然、レアリスムは新たな科学的精神にとって一つの障害となってくるのである（後述）。従って、具象から抽象へと向かう運動が科学的精神にとって是非共必要なのである。そこで、科学的観察が視覚を頼りにして網膜に映じたままを形象化することにとどまるものでないことは明らかであろう。

「……観察は、注視する前に熟慮するようにしむけ、少くとも最初に視たものを改める慎重な姿勢を必要とする、従って最初の観察が決して正しい観察とはいえない。科学的観察とはいつも論争的観察なのだ、それは、以前に立てられた命題、あらかじめ決められた図式、観察図面を確認するか或はその欠陥をあばくかであって、証明することによって教示し、外観に段階を設け、直接的なものを超越する。科学的観察は実在の図式を改造したのちその実在を造り直すのである。観察から実験作用へ移行するや否や、当然、認識の論争的性格は更にもっとはっきりしてくる。そのとき、現象は選別され濾過され純化され、道具の鋳型に流し込まれ、道具の図面に基づいて生み出されねばならない。

処で道具とは物質化された理論でしかない。至る処に理論的特徴を備えた諸現象が道具から生ずるのである。[7]」即ち、道具が現象と理論とを結ぶ媒介の役割を演ずるというよりも、道具とは現象の意味であり、物質としての道具そのものが現象理論の根拠であって、そこに一種の現象学――技術現象学が成立するものと考えられる。「真の科学的現象学とは従って本質的には技術現象学（現象工学）なのである。[8]」併し乍ら、バシュラールがここで言っている現象学とは、科学的認識の基礎となるべき現象に関する学であって、後期に於ける彼の現象学とは極めて異っているのである。というのも、彼の後期の現象学は、詩的イマージュを産出する意識つまり創造的意識の働きの本質的探究であって、その場合の現象学とは「個の意識に於けるイマージュの出発についての考察[9]」なのであったからである。

ひるがえって、科学的思考にとって今一つ重要な基礎は現象に対する本体なのである。ここに彼に於ける科学的な現象と本体との二元論が成立する。彼の言う本体とは原子物理学に於ける物体を指すのであり、[10]又それは「諸概念を集中させる一つの中心[11]」なのである。彼にとっては、原子物理学が本体的諸概念を試す機会を我々に与える、従って、現代の原子科学は、諸現象の記述より以上のもの即ち諸現象を作り出すものとなる。[12]あらゆるものを、知覚に於ける現象と思考に於ける本体とに判別するとすれば、「科学的現象と科学的本体との間で……問題になるのは、もはや漠然とした無為の弁証法ではなくて、投企の若干の修正に続いて常に本体の有効な現実化へと向かう往復運動なのである。[13]」科学的精神に於いては、知覚の段階から思考の段階へ、即ち具象から抽象へ・現象から本体への方向をとる運動が必要であると同時に、再び抽象から具象へ・本体から現象への還帰の運動を要するのであって、その後者が本体の有効な現実化への方向をとることになるのであろう。いずれにせよ、「明らかに……知覚される対象と思考される対象とは異った二つの哲学的審級に属する。その場合、ひとは対象を二度、即ち一度はそれを知覚するとき今一度はそれを思考するときに描き出すことが出来る。ここでは、対象は現象でありそして本体である。本体である限りでは、対象は一般的認識の対象が所有していない完全化という将来へと開かれている。科学的本体とは単なる本質ではなく、思考の進歩なのである。……科学的本体の明白なしるしとしての此の思考の進歩は現象の知覚と比べることによって明白となる。一つの対象の知覚は深い意味をもたない一つのしるしとして現れる。……知覚されたものを明確にする

ことは、ただ知覚の連合を多様化するだけのことである。それに反して、科学的対象を明確にすることは、前進的本体化を語り始めることである。どの科学的対象も認識の進歩という特徴を帯びている[14]」のであった。

ミクロスコープの発達に伴って原子物理学の領域に於ける物体（対象）としての本体―微粒子（電子等）が発見され、更に光などの波動説と粒子説との論争的対立から、相補的共存という仮説が生れる迄に到ったのであるが、もともと電子等の物質粒子には、波動性と粒子性の二面が存在するのであって、粒子の位置とその速度とは全く異った秩序に属するが故に、同時に二つのものを正確に測定することは極めて困難なのである。量子論に於ける光量子は、光のエネルギーを到達し得る限り極小化したものであって、量子力学に於いては、光量子も電磁場を構成する一種の素粒子であった。実際には量子論が効果的な役割を演じているのは、マクロフィジクの世界に於いてではなくて、ミクロフィジクの対象即ち電子・原子核・光量子など素粒子の世界に於いてなのである。バシュラールの科学哲学的関心の的は、マクロの世界にはなく主としてミクロの世界にあった[15]。「実際、一つの現象に関して得られた二つのイマージュ・二つの観点のみが問題になる場合、何故粒子と波動との間に一種の因果関係が求められるのであろうか？　事実、粒子を導く誘導波動を頭に描く考え方は、粒子と波動との単なる結びつきを言い表わすための隠喩しかもたらさなかった。言い得ることといえばたかだか、かかる結びつきは因果的でもなければ実体的でもないということに過ぎない。粒子と波動とは機械論的に結ばれる物ではないのである[16]。」たとえ、量子力学の立場から、光の粒子性が電磁場の量子化によって光の波動性に付け加えられようと、又光やその他の物質の電磁波の一点から別の一点迄の距離測定を、幾何学的に一定の時間空間内での時間測定に還元し、その位置と速度との関係が明らかになるという相対性理論に於ける仮説が理論的に可能であろうと、実際にはマクロの世界では測定値の誤差は極めて小さいためその仮説を適用し得るのであるが、量子論的ミクロの世界に於いては、位置と速度・エネルギーと時間といった夫々二つの量の不確定度について一方が減少すれば他方が増大するというハイゼンベルクの不確定性原理によって、古典的測定法の因果的決定論とはっきり袂別しても、又量子化された場の理論からなる素粒子論によって波動性を粒子説に包み込もうとしても、その二面性の結びつきは科学認識論の領域で完全に明確化し得ないのではなかろうか。それはむしろ形而

上学的存在論乃至本体論の問題として考察さるべきであろうか。それはさておき、バシュラールの波動と粒子についての象徴的な言葉によれば、「波動は賭のゲーム盤であり、粒子は一つのチャンスである。波動と粒子との実在論の問題は、従って少しずつ決定論と蓋然論との問題と渾然一体となっていく」[17]のであった。かくして、「ハイゼンベルクから、……古典的な決定論の考え方たる粗暴にして独断論的な否定とは当然異った非-決定論的物理学が構成される。ハイゼンベルクの非決定論的物理学は、それらに於いて一つの現象が実際に決定されるものと見做され得る処の諸条件や諸制限を明確に固定させることによって、どちらかといえば決定論的物理学を吸収している」[18]と言い得よう。

ここで、我々は非-決定論的物理学の non- がバシュラール独特の否定であることに注目しなければならない。彼がその作品の各処で使用している non-、例えば非-ベーコン主義、非-デカルト的、非-ユークリッド的、非-アルキメデス的、非-ニュートン的、非-ピタゴラス的、非-ラヴォワジェ的、非-アリストテレス的、非-カント主義、非-ロートレアモン主義等々[19]について、我々はその異様さに驚きを感ずるのである。バシュラールはその著『否定の哲学』に於いて次のように述べている、「否定は初期の形成と接触を保っていなければならない。それは弁証法的一般化を可能にする筈である。non による一般化は、それが否定するものを含んでいなければならないのだ。実際、一世紀前からの科学的思考の飛躍的発展は、否定されたものの包含を伴ったかかる弁証法的一般化から生じているのである。従って、非-ユークリッド幾何学はユークリッド幾何学を包含しており、非-ニュートン力学がニュートン力学を包み込み、波動力学が相対論的力学を含んでいる。……〔中略〕……核物理学、換言すれば非-物理学は従って物理学を包含しているのである[20]」と。彼の否定は否定されるものを全く拒絶してうけつけないとか、それを破棄するということではなく、それを含み弁証法化することを意味する、即ち「否定の哲学は……拒否の態度ではなく和解の態度であることが明らかになるであろう[21]」と考えられている。前世紀的な科学もそれ自身否定されることによって新たな科学的精神に貢献するばかりではなく、それは又所謂弁証法的一般化の下、新たに生れた科学的精神によって包接されるのである。従って、核物理学は古典的物理学を、非決定論は古典的決定論を言わば下位集合として包み込んでしまうのであろう。処で、バシュラールの弁証法には包含と融和（又は和解）との二面性があるように思える。数学・物理

学・化学等の科学的精神の形成に伴って、古典的、前世紀的、現代的の三区分が提示されているが[22]、前世紀的又は現代的段階は夫々その前段階との間には包含の関係が見られるのに対して、物質の粒子性と波動性との二つの概念の間には和解の関係が考えられている。「……粒子の概念と波動の概念とを、この上もなく木目細かにそれらを適用することによって、密接に結合させねばならない。もしその接合がうまくいき、それが否定の哲学を介して行われるなら、続いて何故両概念が大雑把なそれらの適用に際してぶつかり合わなかったかが充分容易に解るであろう。[23]」即ち、接合は互いに衝突し合ってこそ可能であるが故に両者は和解の形の下で結合されるのである。併し乍ら、かかる和解も究極的には一方が他方を包接する形でしかないことは先述の通りであろう。いずれにせよ、「弁証法は合理的組織を非常に適確な超合理的な組織によって囲むのに我々に役立つだけである。それは我々が一つの体系からもう一つの体系へと転ずる際にのみ役立つのである[24]」という彼特有の弁証法に則しつつ、科学的思考にとっての認識論的障害始め多面的な障害を明らかにして、それらを乗り超えようとする試みが、彼の所謂精神分析を通して果してどのような成果を挙げ得たのであろうか、それをこれから検討して行くことにしよう。

Ⅲ

先述の科学的認識の進歩が科学の進歩の上に成り立っていることは言う迄もない。そこで問題になってくるのがその科学の進歩の心理学的諸条件なのである。科学的精神に於ける心理学的諸条件を考察する際に、科学的認識の問題提起の形で、障害という用語が使用され、先ず認識論的障害である惰性の原因を求めなくてはならなくなる[25]。そして「過去の諸々の誤謬を再び問題にする……[26]」即ち問題を提起する勇気が科学的精神にとってもどんなに重要であろう。又、「正に此の問題意識こそ真の科学的精神の特徴を示している[27]」のであった。けれども、惰性的な認識論的障害は問うことを止めさせるだけではなくて、その知的な慣性即ち固定観念がその価値付加作用によって自らの価値をどんどん増大させ、遂には精神全体にその支配権を行使するに至る。人間は本能的に自己保存の傾向性を帯びているので、自己の所有していると思われるものが浸されはしまいかと警戒する余り、新たに自らが問うことにも他からの問いかけに対しても同様に拒否反応を示すのであろう。そうするとも早や科学的認識の進歩・科学的精神の展開は全く望め

なくなってしまうのである。[26]

さて、バシュラールが科学的認識の第一の障害として挙げているのは、最初の経験乃至最初の観察なのである。[28]「科学的精神の形成に際して、一番初めの障害とは最初の経験であり、批判以前に且つ批判の彼方に位置を占める経験であって、その批判はどうしても科学的精神にとって必要欠くべからざる一つの要素なのである。[30]」我々はここに彼の経験主義的認識の批判を見ることが出来よう。「事象そのものへ」を単に直接的な感覚的経験をもって実現されるものと考えるような素朴な思考は当然科学的思考とは言い得ない。[31]ひとは自分が事象そのものに忠実に則していると信じ込んでいる余り、知らず知らずに客観的認識に際して価値付加作用を行っている。従って、「客観的認識の領域に於けるどの価値付加作用も精神分析の機会をもたらすはずである……」[32]のであった。中でも、「錬金術の心理学的に具象的な性格」[33]が彼の精神分析の最も意味深い対象となって行くのである。錬金術的経験というものは、中世にとどまらず近世に於いても尚深く一般的思考の中に残存していたことについてバシュラールは、その「根強さの核心は素朴な合理主義の想像も及ばないところに隠されている筈だ。錬金術は無意識のうちにより深い源泉をもっている筈である」[34]と述べている。確かに錬金術的経験は科学的思考にとって一つの障害であったし、錬金術師たちに見られる主観的でもあり客観的でもあると同時に神秘的である処の、自己の魂を燃えつきさせるような「此の情的な根源的同一動作反復」[35]は、科学的精神を強調するバシュラールにとって精神分析の対象として当然明らかにされ、今尚残存する錬金術的迷妄を打破すべきであったであろう。それにも拘らず、炉を前にした錬金術師の夢想に遭遇するときも早やそれは科学的認識の障害としてではなく、隠喩として魂の浄化に役立つことを彼は認めずにおれなくなるであろう。それこそ彼にとって主観性より以上のもの即ち超主観性の賜物ではなかったろうか。

ひるがえって、科学的認識の障害としてこの「最初の経験」に続いて彼が挙げているものに「一般的認識」がある。「余りにも一般的な概略的理論の非活動性」[36]によって硬直した一般的認識が、科学的思考にとって必要な修正 la rectification 乃至修正作用 le redressement を停止させてしまい、力動的にして多産的な科学的概念の変形力 la puissance de déformation は一般的思考によってその力を失ってしまうのである。[37]かくして、一般的認識による非活動的な硬直した一般的思考とは、共通の潜在的感覚的思考に

よって価値を付与された概念であり、そして厳密な適用条件又は限定条件をもたない曖昧な思考なのであった。[38]

次に、スポンジという言葉のうちに含まれる素朴なイマージュが彼の精神分析の対象となる。そして、言葉による卑近なもののイマージュが前科学的思考に大きな足跡をとどめていることは誰の目にも明らかである。「最初の直観は科学的思考にとって一つの障害である、[39]」そして「……最も強力な障害というのは実在論的哲学の直観につながっている。極めて物質化された此の障害が一般的特性でなく実体的特質を引き入れる。そのとき、より隠れた、より主観的、より内在的な経験のうちに、全くの精神的惰性が巣食うのである。[40]」

処で彼は又、前科学的精神に於ける一元性への欲求が数多くの虚偽のテーゼをひき起こしたことをとり挙げている。前科学的思考にあっては二元性を嫌悪する意識が常に働き、ひとは二元論では何か落ち着かない気分になり、どこかで誤りを犯しているのではないかという懸念を抱くようになる。そこで一元的なものを求めるのであろう。かくして、前科学的思考では「物理的作用を介しては機構的に不可解なものは、それが神の行為に結びつけられるとこのように理解し得るようになる。[41]」併し勿論、現代の科学的精神は「理解可能の一元性という此の神話と縁を切った[42]」のである。更に、世界の調和的一元性に立脚した幾多の前科学的な考え方が存在し、それに基づく占星術などに見られるフロイト流の多元的決定も、バシュラールに於ける精神分析の対象となる客観的世界の調和の概念に相当するものとしてとり挙げられている。[43]その上、「理解可能の一元性」や「世界の調和的一元性」という神話が、暗々裡に一つの功利的乃至は実用的合理主義に裏付けられていることを彼は指摘する。所謂「功利的帰納法」なるものによって「極端な一般化」が行われ、「どの実用主義も……否応なしに自らを誇張する。人間は功利性を制限し得ない。功利性はその価値付加作用によって無制限に自己資本を蓄積するのである[44]」と。

このようにして彼は科学的認識の障害たる一元的且実用的認識を明らかにした上、「実体論的障害」へと移って行く。それは、いろいろなものの特性を実体に結びつけ各特質間の関係性を見逃してしまうという前科学的思考の弊害を示そうとするものであった。何か隠されたものに特別な意義を認め、それにあらゆる物の性質・状態・作用の制約者としての権能を付与しようとする傾向が前科学的精神に於いて顕著に認められよう。「精神が特殊な一現象の実体

的性格を受けるや否や、隠喩に対して身を守る如何なるためらいもも早やもたなくなる」[45]し、「実体論的誘惑のうち最も明らかな徴候の一つは、同一名詞へ形容詞を幾つも重ねることである。諸性質が極めて真近に実体に密着しているので、それらの相互関係を余り気にかけないで諸性質を並置することが出来る。そこに実験を呼び起こすことから程遠い安穏な経験主義が存在する」[46]のであった。更に彼は引き続いて「実在論者の精神分析」に論を進める。実在論が所謂内在的な哲学であること、そしてひとははっきりした自分の利得を所有するように実体を精神的に所有しようとすることに気付き、実体論的思考を目覚めさせるためには「所有するという感情」について精神分析しなければならないと彼は考える[47]。その上、誰もが知る宝石の所有についての客観的又は社会的価値付与の上に積み重ねられる主観的な価値付加作用の解明を通して、「富の所有」・「守銭奴的喜こび」等々が実在論者の心的傾向と相通じることが示されている[48]。又錬金術師を支えてきたものに「富への野望」があったことからも当然それは精神分析を施されるべきであった[49]。処で、「実体的潜勢の過大評価」は如何ともし難いものであって、「実在論者が形成する虚像」は主観的な個人的印象によって造り上げているもので消し去ることは極めて困難である[50]。かくして、実体論と実在論とは言わば競い合って同質の障害を形づくっているのであって、実在論の物と実体論に於ける諸性質等の統合としての実体とは共に「実体的潜勢の過大評価」という点でも、共通のしかも矯正することの最も困難な障害となっていると同時に、心的には精神分析の対象としての共通のコンプレックスを認めることが出来よう。そしてこれに加わるに、「アニミスムの障害」が論じられてくる。「自然はその全現象に於いて成長と生命との一般的理論に巻添えになっており[51]、」「植物の生長は無意識に崇拝される対象であるように思える[52]」し、「生命という語は魔術的な言葉であり、価値を付与された言葉である[53]。」従って、前科学的思考は多分にアニミスムの影響を受け、生命現象の幻を払いのけるのに多くの時と努力を続け乍ら果たさず、ここに科学的精神の障害として精神分析されるに至ったのである。更にバシュラールは此のアニミスムの障害の特性の一つとして「消化についての神話」を別の一章で明らかにしている。「消化は最も強力な実在論、最も貪慾な吝嗇の根源である。それは本当にアニミスム的吝嗇の機能なのだ。その体感はすべて内奥の神話の根源にある。かかる内在化〔摂取〕が内在性を公準として立てる助けとなる。実在論者とは食べる

人なのである」[54]と。このような消化に伴う食欲も先述の内在論的所有の生命論的現象への変様と見られている。所有の価値付加作用と同様、食物への価値付与が行われる。そこに、食物の価値と食欲並びに消化との関係の心理的作用を読みとることが出来よう。「……殊に錬金術の実験に於いては消化の神話が惜しげもなく使われている。」[55]即ち錬金術師の発言に消化の領域に属する隠喩が多く含まれ、消化による滋養の吸収作用と食欲との関連が生命論的発想に如何に役立つかを見れば、生物学的観点から常識的に即ち一般的認識の仕方でものを考える前科学的思考を成立させている状態が明らかになろう。又消化に付随する排泄物に付与された価値については、幼児の精神的発達段階に於ける肛門期の精神分析から類比的に領ける。幼児期の性欲も生長して大人になると所有欲に変ってゆくと指摘される点についても、やはり精神分析の対象となるのである。[56]抑圧された無意識或は又「甚しく混乱した無意識」[57]が、排泄物に蒸溜作用を施す等いろいろな手を加えて化粧的乃至薬用的価値を付与しようとする極端に気狂いじみた手法をこらすのも、コンプレックスとして当然精神分析されねばならないのであった。そして論述は食欲から「リビドー」へと移る。

「消化の神話は生殖の神話に比べれば全く輝きを失う、持つ〔所有〕と在る〔存在〕とは成る〔生成〕の前では何の価値もない。精力的な魂は成る為に持つことを望む」[58]ものである。直接的な食欲よりもリビドーの方に精神分析の重点が置かれ、長き思惟・長期間練られたもくろみ・忍耐を要するリビドーこそ、障害として精神分析の対象の最たるものであろう。内部持続としての時間にリビドーは直接間接に深い係わりをもっている。それは「時間の価値付加作用の原理そのもの」[59]である。彼は又、神秘的なものを集中した錬金術の探究と生殖の秘密として隠されたリビドーを求めることとの類比性に注目している。そして、錬金術師たちの心的状態について彼は「錬金術用の炉に夜通し向かっている人の孤独のようなどこ迄も続く孤独は性的誘惑から免れ難い」[60]と指摘する。

併し乍ら、科学的思考にとってのかかるリビドーのもつ大きな障害が深層心理に根ざす抜き難いものであることを彼は充分承知していたのである。科学的精神と無意識との相剋程苦悩にみちた争いはないであろう。精神そのものがその心的内奥より揺さぶりをかけられる内患にどう対処すべきかは既に精神分析の領域を超えているのではなかろうか。科学的精神の形成に於いて、認識論的な各種の障害を

明らかにすることは可能である。けれどもそれらを完全に取り除いたり乗り超えたりすることは、それを要請乃至公準として立てることが出来ようとも、実現することは不可能に近いと言わざるを得ない。彼の提示する数々のコンプレックスは紛うことなき心的事実であり、精神分析によってその障害を明示することによって乗り超えらるべきものであり乍ら、それら心的状況が明らかになることによって益々豊かな物質的想像力がそのみのり多き生産性を発揮することに彼は驚嘆せざるを得なかったのであろう。それには数多くの障害のもつ価値付加作用を昇華させることを要する。「精密科学の領域に於いてさえ、我々の想像力は昇華作用である。……想像力はひとがその原理を精神分析した範囲でのみ有効である」[61]のであった。厳しい科学的精神の監視態勢の下に、誤謬と障害とを一つ一つ検閲してそれらを乗り超えようとするたゆまない努力を積み重ねる必要性を説く彼の科学哲学者としての一面を決して軽視してはならない。「客観性への瞬間を生き且つ体験し直すこと、絶えず客観化の生れる状態にあること、それには脱主観化への絶えざる努力が要求され、」[62]「科学的思考が現象学的思考を変革する、現代科学は益々反省の上にも反省を行う」[63]必要があるのであろう。

Ⅳ

ところが科学的精神にとって、直接的対象との絶縁や絶えざる客観化への努力が要請されるにも拘らず、「客観的態度が一度も実現され得たことがないという問題、最初の魅惑力が非常に決定的であるので、最も健全な精神をも歪めそして夢想が思考と入れ替わり詩が定理を隠してしまう詩的な我が家へといつもそれら精神を連れ戻すという問題」[64]が浮かび上ってきたのである。即ち「火の精神分析」がそれに当たる。「火はも早や科学的対象ではない、それは……科学的研究にとって如何なるパースペクティヴも開いてはいない」[65]。そこで火は心理学的に「主観性の軸」[66]に沿って分析されることとなるのであった。従ってここでは、「物思いに耽る人」・「火が輝き燃えているとき、孤独の意識の如く炉端でひとり物思いに耽る人」[67]がその研究対象なのである。火の精神分析とは「火の現象の認識に関する主観的確信の精神分析」[68]であった。

それではバシュラールによる火についての此の上ない価値付けを見てゆこう。「火とは超－生命である。火は内的であり普遍的である。それは我々の心の中に生きている、それは空中に生きている。それは実体の深層から昇ってき

て愛の如く身を捧げる。それは物質の中へ再び降りてきては、憎悪と復讐の如く潜伏し抑圧されて身を隠す。あらゆる現象の間で、火は相反する二つの価値付加作用即ち善と悪とを同様に文句なく受け入れ得るそれこそ唯一のものなのである。火は楽園では輝き地獄では燃えている。それは快よさであり苦しみである。火は炊事〔用〕でもあり黙示でもある。火は炉端でおとなしく坐っている子供には楽しさであるが、併し余り近くで焔と遊び戯れると如何なる違反も見逃さず罰するのである。それは幸せをもたらし尊崇の的となる。火は守護と恐怖の神・善と悪の神である。[69]」このように火のもつ二重の価値付与的性格が精神分析される所以は、「経験的且科学的認識の根底そのもので無意識的諸価値の働きを見出すこと……[70]」、並びに「絶えず客観的且社会的認識から主観的且個人的認識へそして又逆の方へと進む相互の光を示す[71]」点にあった。子供が火に手を近付けようとすると父親にその手を打たれる。「従って火は先ず最初は一般的禁止の対象であり、……社会的禁止は火についての我々の最初の一般的認識なのである……。[72]」処で此の禁止に対して子供は親の目を盗んで火に近付いたり火を付けてみようと思う。火は神秘的で何か特別な魅力をもっており、又その意味でも一種の尊崇の的でもあり得よう。「プロメテウス・コンプレックス」が「火の父の伝説」によって火への関心をひとに抱かせるのも頷ける。そして、ひとをして自分の親や先生以上に知るように仕向けるあらゆる傾向に彼は「プロメテウス・コンプレックス」という名を付したのである。[73]

更に、「……火を前にした夢想、その幸せを意識する心地よい夢想は、最も自然に集中させられた夢想であり[74]」、「炉端での夢想はより哲学的な軸をもつ。火はそれを凝視する人間にとって束の間の生成の鑑であり偶発的事象の生成の鑑である[75]」そして「火は、時間を変え早めようとする欲望、全生命をその終末へ、その彼岸へともたらそうとする欲望を暗示する。その時夢想は真に魅惑的且劇的になる、それは人間の運命を拡大する、それは小さなものを大きなものに、炉を火山に、一本の薪の生命を一つの世界の生命に結びつける。魅せられた者は焚刑の呼び声を聞く。彼にとって破滅は変化より以上のものであり、一つの再生なのである。極めて特殊ではあるが併し非常に一般的な此の夢想は、火への愛と尊崇とが、生きんとする本能と死なんとする本能とがそこで交わる真のコンプレックスを引き起こす[76]」これが彼の言う「エンペドクレス・コンプレックス」なのである。このようにしてバシュラールは尚コンプレッ

クスを語り続ける、「自然の温かさを倍加するように、人間によって温められた人間の思い出がなければ、恋人たちが閉じ籠っている自分たちの巣について語るのをひとは心に描くことも出来ないであろう。柔らかな温かさは従って幸福の意識の始まりである。もっと正確には、それは幸福の始源的意識なのである[77]」と。

そこでバシュラールはノヴァリスの作品の中より感じとった「山のくぼみでの下降、洞窟や坑道の中への下降」を象徴的にとらえ、「ノヴァリスは大地の熱き内奥を夢見、」「集中した熱で生きる。彼は暗い深淵の縁で、どんなに屢々瞑想に耽ったことか！……彼は詩人ではあったが、地下の呼び声に従うため、《生気漲る温かさ》に戻るために技師となった[78]」と言う。大地の生み出す火への欲求、「摩擦によって起こされる火への衝動、分かち合われる熱への欲求[79]」こそ、バシュラールの名付ける「ノヴァリス・コンプレックス」を物語っていよう。即ち「ノヴァリス・コンプレックスはいつも光の全く視覚的な知識に勝る内奥の熱意識によって特徴付けられる[80]」のである。いずれにせよ人が真理に遭遇することを望むなら、「無意識の深層にまで達し詩人とともに原初的な夢をとり戻す[81]」ことが必要であろう。

処で先の「科学的精神の形成」の中での、錬金術についての彼の論述から、彼は「どの錬金術も、限りなき性的夢想によって、富と若返りの夢想によって、潜勢の夢想によって貫かれていたこと」を再びとり挙げ、「此の性的夢想は炉端の夢想であること」、「錬金術は端的に炉端の夢想の性的特質を実在化すること」、そして「錬金術は、客観的現象の記述であるどころか、物の中心に人間の愛を刻みつける企てである[82]」ことを強調している。そしてかかる炉端の夢想に於ける、「孤独な男の瞑想の対象たる、内奥のそして雄々しき此の火は、当然最も力強い火である。殊にその火こそ《物体を開く》ことが出来るのだ。……〔中略〕……物体のかかる《開け》、内部からの物体のかかる所有、かかる全体的所有とは、時に明白な性行為なのである[83]」と同時に、「性化された火は、此の上もなくあらゆる象徴を結びつける閃めきである。それは、物質と精神、悪徳と美徳とを結合する。それは物質主義的認識を理念化し、観念主義的認識を物質化する[84]」のであった。このように「火によってすべてのものが変る。すべてが変ることを望むとき我々は火を呼ぶのである。最初の現象というのは、暇な時間に、火の生命とその閃光（カガヤキ）の中で瞑想された火の現象ばかりではなく、それは火によって起こる現象でもあり、[85]」「人の

注目に値する最初の現象は火気現象なのである」[56]と述べた上で、バシュラールは前科学的な思考のうちに「火の糧」[57]なる言葉があることに着目する。何ものをも食い尽くす火・糧と空気なしには（尤も空気も糧の内に含まれようが）生きられない火についての精神分析がなされていくのであった。「火の糧という無意識的価値付加作用がどこ迄達するのか、そして前科学的無意識のうちに、パンタグリュエル・コンプレックスと呼ばれ得るものを精神分析することが如何に望ましいかを検討しようと思う。実際、燃焼するものはすべて火気の糧 pabulum ignis をうけ入れねばならないというのが前科学的原理なのだ。」[58]そして如何なるものも焼き尽くす火は又情熱をも暗示する。善しにつけ悪しきにつけ、火は水と対照的に我々の最初の原的経験によって深く深く我々の心の深層に浸透し、多大の価値が付与されていることは、筆舌に尽くし得ない程であろう。「実体〔物質〕として火は確かに最も多く価値を付与されたもののなかに入り、従って客観的判断を最も多く変形する物質である。多くの点で、その価値付加作用は金の価値付加作用に相当する」[59]のであって、「多くの場合、錬金術師は金が元素的な火の集積場であるが故に、金に価値を付与する、即ち《金の精髄はそっくり火なのだ。》その上一般的物質のうち、価値付加作用の真のプロテウスたる火は、最も形而上学的な本源的価値から最も明白な功利性へと移行していく。それこそ、真にあらゆる自然の働きを要約する根本的な活動原理なのである」[60]と、彼の火に対する評価は益々エスカレートしてゆく。

「火酒とは火の水である。それは言葉を焼き焦がし極めて小さな火の粉となって燃え立つ水である。」[61]アルコールは直ちにひとに熱を与え、身も心も内から燃え上がらせる。「アルコールは胸のくぼみに忽ちその熱をもたらす即席の糧でもある、……従ってアルコールは明白な実体的価値付加作用の対象なのだ。」[62]喜びにつけ悲しみにつけ、又楽しいときも苦しいときも、火の水としてのアルコールは飲むひとの心の内奥に迄滲み通り火の饗宴（ウタゲ）を催さしめる。人類の文化（火）の発詳とアルコールの発見とが対応して並び語られるのも象徴的ではなかろうか。しかも火とアルコールとの類縁関係は以上の価値付加作用に於いてかくの如く明白であると言い得る。

併し乍ら、「火についての真の理念化は火と光との現象学的弁証法に従うことによって生み出される。我々が弁証法的昇華作用の根底に見出すあらゆる感覚的弁証法の如く、光による火の理念化は現象的な矛盾に根拠を置く、即ち時

折火は燃えずして輝くこともある、そのとき火の価値は文字通り純粋性そのものだ[93]」と彼は考える。火は光によって昇華され、光は又火によって性化されると言ってもよかろう。「光による火の理念化」、一見矛盾した「火が燃えずして輝く」という現象の暗示は、火が光によって弁証法的に昇華され、浄化作用的様相を呈しつつ純粋性という価値を付与されることを物語っている。光こそ火の崇高性を示す唯一のものと考えられる。「その時、光は火の超-価値付加作用である。光は、我々が今や無意味なものと見做している事象に意味と価値とを与えるが故に、それは超-価値付加作用なのである。[94]」

かくして我々の詩的想像力にもとづくインスピレーションも正しく此の火の理念化された光に象徴され、火を観想する夢想は同時にそれの純化された光の夢想へと転ずることによってより創造的となり得るであろう。いずれにせよ「もろもろの隠喩は、詩的精神が純粋且端的に隠喩の統辞法になってしまう程、互いに呼び合い、もろもろの感覚より以上に組み合わされており[95]」、従って「何よりも先ず、隠喩に殊に隠喩の隠喩に達するためには、反射的表現の飛躍を打ち砕き、いつも馴染んでいるイマージュを精神分析せねばならない[96]」のである。その上、「意志にもまして、生命の飛躍にもまして、想像力とは正に心的生産の力そのものである。心的には我々は自分の夢想によって創造されている。我々が自分の夢想によって創造され限定されているというのも、自分の精神の極限を描くのは夢想であるからなのだ。想像力は焔の如く精神の頂きで働くのである[97]」と彼はその結論の中で述べている。そして、バシュラールは「火の精神分析」の最後の方で次の如く結ぶ、「燃えるのを意識することは冷えることであり、烈しさを感じることはそれを弱めることである、……かかる両義性のみが情熱的なためらいを説明するのにふさわしい。従って、火に結びつくあらゆるコンプレックスは究極的に苦悩のコンプレックス・神経症にすると同時に詩的にするコンプレックス・顚倒し得るコンプレックスである、即ちひとは火の運動の中にかその休息の中に、焔の中にか灰の中に楽園を見出すことが出来よう[98]」と。以上の引用に於いて、既にバシュラールの物質的想像力、そして詩的想像力が問題になっていることに我々は注目しなければならない。彼は主観性と客観性とを明確に区別し科学的精神に於ける客観化への努力を促しつつ、その認識論的障害を克服すべく精神分析を進めてゆくうちに、「火の精神分析」に至って主観性の純粋な姿が益々浮き彫りにされて来ていることが、彼の論

述からはっきり読みとれるのである。そこで我々は別の機会にこの豊富な生産力をもった想像力、彼の所謂「物質的想像力」についての論述を解明することによって、ベシュラールの詩的想像力の現象学的考察へと移ってみたいと思うのである。それは彼の思想の綜合的首尾一貫性を求めるためでもある。最後にベシュラールの想働力に関する一文を提示して此の論を終ることにする。

「想像力と意志とは同一の深い力の両面である。想像することの出来る者は欲することが出来る。意欲を照らす想像力に、想像しようとする意志、想像されるものを生きようとする意志が結びつく。細部に迄亘ってもろもろのイマージュを順序よく並べて見せることによって、ひとは首尾一貫した行動を決定するのである。[19]」

註

① Quillet, Pierre : " Bachelard ", Seghers, 1964 ; Dagognet, François : " Gaston Bachelard ", P. U. F., 1965 ; Pire, François : " De l'imagination poétique dans l'œuvre de Gaston Bachelard ", Corti, 1968 ; Ginestier, Paul : " Pour connaître la pensée de Bachelard ", Bordas, 1968 ; Gagey, Jacques : " Gaston Bachelard ou la convertion à l'imaginaire ", M. Rivière et Cie., 1969 ; Therrien, Vincent : " La révolution de Gaston Bachelard en critique littéraire ", Klincksieck, 1970 ; Margolin, Jean-Claude : " Bachelard ", Seuil, 1974 ; Schaettel, Marcel : " Bachelard critique ou l'alchimie du rêve ", L'Hermès, 1977 ; etc. ② Le rationalisme appliqué, P. U. F., 1949 ; L'activité rationaliste de la physique contemporaine, P. U. F., 1951 ; Le matérialisme rationnel, P. U. F., 1953 ③ L'intuition de l'instant, Stock, 1932 ; La dialectique de la durée, Boivin, 1936 ④ La formation de l'esprit scientifique, Vrin, 1975, (以下, F. E. S.), p. 5 ⑤ ibid. ⑥ Étude sur l'évolution d'un problème de physique, Vrin, 1973, p. 157 ⑦ Le nouvel esprit scientifique, P. U. F., 1975, (以下, N. E. S.), p. 16 ⑧ N. E. S., p. 17 ⑨ La poétique de l'espace, P. U. F., 1974, p. 3 ⑩ L'activité rationaliste de la physique contemporaine, P. U. F., U. G. E., 1977, p. 134 ～ p. 135 ⑪ Études : Noumène et microphysique, Vrin, 1970, p. 23–p. 24 ⑫ Études, p. 24 ⑬ N. E. S., p. 16–p. 17 ⑭ Le rationalisme appliqué, P. U. F., 1975, p. 109–p. 110 ⑮ N. E. S. : Ondes et corpuscules, p. 100 ⑯ N. E. S., p. 99 ⑰ N. E. S., p. 101 ⑱ N. E. S. : Déterminisme et indéterminisme, p. 125 ⑲ Études : Lumière et substance, p. 45 ; N. E. S., p. 139 sq. ; N. E. S., p. 11 ; La philosophie du non, P. U. F., 1975, p. 15, p. 112 –p. 113, p. 123, p. 137 etc. ; Lautréamont, Corti, 1974, p. 154 etc. ⑳ La philosophie du non, P. U. F., 1975, (以

下, P. N.), p. 137–p. 138 ㉑ P. N., p. 15–p. 16
㉒ F. E. S., p. 7 ㉓ P. N., p. 143 ㉔ P. N., p. 137
㉕ conf., F. E. S., p. 13 ㉖ ibid. ㉗ F. E. S., p. 14
㉘ conf., F. E. S., p. 15 ㉙ conf., F. E. S., p. 19
㉚ F. E. S., p. 23 ㉛ conf., F. E. S., p. 44 ㉜ F. E. S., p. 53 ㉝ F. E. S., p. 46 ㉞ F. E. S., p. 47
㉟ F. E. S., p. 48 ㊱ F. E. S., p. 55 ㊲ conf., F. E. S., p. 60–p. 61 ㊳ conf., F. E. S., p. 72 ㊴ F. E. S., p. 78 ㊵ F. E. S., p. 82 ㊶ F. E. S., p. 87
㊷ ibid. ㊸ conf., F. E. S., p. 88 ㊹ F. E. S., p. 91
㊺ F. E. S., p. 111 ㊻ F. E. S., p. 111–p. 112
㊼ conf., F. E. S., p. 131–p. 132 ㊽ F. E. S., p. 132 sq.
㊾ conf., F. E. S., p. 145–p. 146 ㊿ conf., F. E. S., p. 147–p. 148 (51) F. E. S., p. 152 (52) F. E. S., p. 153
(53) F. E. S., p. 154 (54) F. E. S., p. 169 (55) F. E. S., p. 175 (56) conf., F. E. S., p. 178 (57) F. E. S., p. 180
(58) F. E. S., p. 183 (59) ibid. (60) F. E. S., p. 186
(61) F. E. S., p. 237 (62) F. E. S., p. 248–p. 249 (63) F. E. S., p. 250 (64) La psychanalyse du feu, Gallimard, 1976, (以下, P. F.), p. 10 (65) P. F., p. 11 (66) P. F., p 12 (67) ibid. (68) P. F., p. 14 (69) P. F., p. 19–p. 20 (70) P. F., p. 23 (71) ibid. (72) P. F., p. 25
(73) conf., P. F., p. 25–p. 26 (74) P. F., p. 32 (75) P. F., p. 34–p. 35 (76) P. F., p. 35 (77) P. F.. p. 68
(78) P. F., p. 71 (79) P. F., p. 70 (80) ibid. (81) P. F., p. 72 (82) P. F., p. 87 (83) P. F., p. 90 (84) P. F., p. 92 (85) P. F., p. 96 (86) P. F., p. 96–p. 97
(87) P. F., p. 109 sq. (88) P. F., p. 111 (89) P. F., p. 119 (90) P. F., p. 120 (91) P. F., p. 139 (92) ibid.
(93) P. F., p. 173 (94) La flamme d'une chandelle, P. U. F., 1975, p. 28 (95) P. F., p. 179 (96) P. F., p. 180–p. 181 (97) P. F., p. 181 (98) P. F., p. 183 (99) L'air et les songes, corti, 1976, p. 130

(本学助教授 哲学)